

[報告] 第32回歴史地震研究会参加記

木戸 崇之* (朝日放送報道局)

The participation report of the 32nd annual meeting in Kyotango city, KYOTO

Takayuki KIDO

Asahi Broadcasting Corporation, ABC,
1-1-30, Fukushima, Fukushima-ku, Osaka, 553-8503 Japan

§ 1. はじめに

去る平成27(2015)年9月21日(月)から23日(水)にかけて、京都府京丹後市峰山で、第 32 回の歴史地震研究会が開催された。峰山は、昭和 2(1927)年の北丹後地震で強い揺れに見まわれ、大きな被害を受けた場所である。また、その 2 年前にも北近畿は、北但馬地震で激しい揺れに見舞われた。その地震から 90 年の節目の年とはいえ、東京からの所要時間としては本州でも有数の遠隔地、しかも秋分の日と敬老の日が近接して出来上がった、シルバーウイークの 5 連休に当たったので、どのくらいの参加者になるのか不安であったが、口頭発表が 40 本、ポスター発表も 14 本を数えた。会場の京丹後市峰山総合福祉センターは多くの方が集まり盛会となった。その内容を簡単に報告する。



写真 1. 研究発表会会場(1日目口頭発表).
(撮影:新谷勝行行事委員)

§ 2. 研究発表会 1 日目

研究発表会の 1 日目は、午前 8 時 45 分から最初のセッションが設定された。奈良在住の筆者でさえ、この時間に間に合うように京丹後に行くのは尻込みする。朝 4 時半に自宅を出て、この夏全線開通した京都縦貫道を経由すると、7 時過ぎにホテルに到着する

ことができ、少し早めに会場入りできた。その後、8 時を過ぎると続々と参加者が現れ、セッション開始ぎりぎりまで受付に追われる光景が見られた。

トップバッターは石橋克彦先生だった。作業仮説とはいえ、1099 年の康和南海地震が実在しなかったのではないかという、チャレンジングでかつ科学的な発表にいきなり心を奪われた。また、福井大学の山本博文先生の若狭湾岸の津波痕跡に関する発表も、時節柄関心を持って聞いた。

筆者の拙い発表に、温かいご意見を頂戴した後も興味深い発表が続いた。個人的には、宍倉正展先生による、3 世紀に砂礫に覆われた串本町笠島遺跡の調査に関する発表に関心を持った。関西で文化財に関する取材を担当する記者としての立場からは、倭国の乱や卑弥呼誕生との関係に思いを馳せずにはいられなかった。

§ 3. ポスター発表

ポスター発表は、会場のロビーで行われた。文献を読み解く歴史的視点と、地震の実相に迫る学術的アプローチとの融合を一覧できるダイナミズムは、この研究会のポスター発表の醍醐味である。個人的な感想になってしまうが、史料に乏しく発生が明らかで

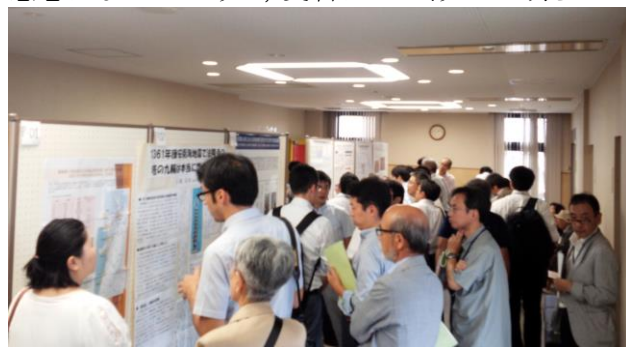


写真 2 研究発表会会場(ポスター発表).
(撮影:新谷勝行行事委員)

* 〒553-8503 大阪市福島区福島 1-1-30 (朝日放送報道局)
電子メール: takayuki_kido @ asahi.co.jp

ない明応南海地震に迫ろうとする JAMSTEC の発表、そして、1361 年の南海地震で法隆寺の塔九輪が燃えたのかどうかを解明された石橋先生の発表が特に印象に残った。奈良の地域のお年寄り(筆者の義父もそうだが)は、「下(した)」のことをよく「しも」と発音する。また、文化財記者としての取材現場では、九輪の上部の炎のような形の装飾は、しばしば落雷による火災で消失する塔ゆえの「忌み言葉」として、「水煙」と呼ぶことが当然と思っていたが、古文書がこれを「火炎」と表現していることを先生が突き止められたことに、至極感服した。

§ 4. 懇親会

懇親会は、研究会会場から徒歩 5 分ほどのプラザホテル吉翠苑で行われた。ばら寿司など丹後の郷土料理が、アットホームな雰囲気彩りを添え、参加者の交流の場となった。



写真 3. 懇親会(乾杯)。(撮影:今村隆正会員)

§ 5. 研究発表会2日目

研究発表会 2 日目は、初日よりさらに早いスタートであったが、参加率は非常に高かった。個人的には、「びやく」が転じて「蛇」になったという土砂災害の地名に注目された井上公夫さん、相原延光さんの発表を興味深く聞いた。さらに、印南中学校の 3 人の生徒さんによる津波研究の招待発表は、彼らの緊張感があふれていて見ている方がドキドキしたが、立派にこなす若者の姿に希望を感じた。災害を通して自分の住む地域の歴史を学ぶ取り組みを、先輩から後輩へと受け継いできた実績は、その地で命をつないできた先祖への感謝の念にもつながる。生徒は毎年変わるので、内容をいたずらに高度にしてゆく必要はない。生徒の防災意識に寄り添った活動が末永く続くことを期待したい。その直後には、グンと年齢が上がって、宇佐美先生が「續 なみの反古拾い」の発表をされた。「冊子の余部を受付で配布します」とおっしゃると希望者が行列を作り、あっという間になくなって、残念なことに筆者はいただくことができなかった。



写真 4. 招待発表の様子。印南中学校の発表者(中央の 3 名)と次の講演を待つ宇佐美先生(左)。(撮影:新谷勝行行事委員)

§ 6. 公開講演会

2 日目の午後は、「丹後震災から 88 年～地震災害と復興」と題して、佛教大学の植村善博先生、豊岡市教委の松井敬代さん、京丹後市教委の新谷勝行さんが、北但馬地震・北丹後地震の被害とその復興、伝承について講演された。この講演会は、京丹後市文化財セミナーとの合同で、市民のみなさんも多く聞きにいらっしやった。筆者の勤務先の放送エリアでありながら、これらの地震についてはこれまで取り上げた記憶はなく、個人的にもほとんど知らない内容であった。90 年前といえば、昭和の東南海・南海地震の前触れの内陸地震と考えることもできる。南海トラフの地震がやってくる前には、同様の地震がどこで起こるか分からない。今まさにこれらの地震から教訓を学ぶ必要がある。そして、今回発表された研究成果を、後世の人々にしっかりと伝えていかなければならない。

総会に先立って、功績賞の授賞式が行われ、宇佐美先生の膨大な地震史料の収集や管理、編纂の仕事陰で支えられ、歴史地震研究会創成期の事務局としても尽力された上田和枝さんに、松浦会長から賞状が贈られた。

§ 7. おわりに

筆者にとっても、はじめて口頭発表の機会をいただくなど、思い出深い研究会となった。ご多忙の中、本研究会のために長期間準備に奔走いただいた、植村先生、そして新谷さんをはじめとする京丹後市の皆さん、歴史地震研究会事務局の皆さんに、厚く御礼を申し上げます。



写真 5. 懇親会会場での集合写真。(撮影:今村隆正会員)